

土

映画文学人生論

原作：長塚節（1910）「朝日新聞」
参考：藤沢周平『白い瓶 小説長塚節』（1985）文藝春秋」
参考：監督；内田吐夢 脚本：八木隆一郎 北村勉
出演：勘次 小杉勇 撮影：碧川道夫
おつぎ 風見章子 音楽：乗松明広
卯平 山本嘉一 与吉 ドングリ坊や

『土』を読むものは、きつと自分を泥の中を引き摺られるような気がするだろう

長塚節『土』は明治四十三年六月から十一月まで朝日新聞に連載された。夏目漱石の推薦により『門』のあとの連載小説に抜擢されたのだが、漱石はその頃、胃潰瘍で苦しみ、いわゆる修善寺の大患を体験した。

九死に一生を得たところで、友人で満鉄総裁の中村是好に誘われて旅行し、同年十月から十二月にかけて『満韓とところどころ』を連載した。その後、明治四十五年の春になって、長塚節が突然尋ねて来た。春陽堂が『土』の出版を引き受ける事になったから、序を書いてくれという。

その序を読むと、こんなことが書いてある。

長塚節の書き方は何処までも沈着である。その人物は皆有のままである。話の筋は全く自然である。余が『土』を『朝日』に載せた時、北の方のSという人がわざわざ書を余のもとに寄せて、長塚節が旅行して彼と面会した折の議論を報じた事がある。長塚節は余の『朝日』に書いた『満韓とところどころ』というものをSの処で一回読んで、漱石という男は人を馬鹿にしているといつて大いに憤慨したそうである。

長塚節が『満韓とところどころ』を読んで憤慨したのなら、漱石に序文を依頼するのはおかしい。



土 映画文学人生論

それがわかっていながら、依頼に応じる漱石は
人好しだが、多忙な身でありながら、前後半日と
中一日を丸潰しにして読了した。

「漸く業を卒（お）えて考えて見ると、中々骨
が折れた作物である。これは到底余に書けるもの
ではないと思った」「作としての『土』は、寧ろ
苦しい読みものである。決して面白いから読めと
は云い悪（にく）い」。「『土』を読むものは、
きっと自分が泥の中に引き摺（ず）られるような
気がするだろう」が、しかし、「余の娘が年頃にな
って、音楽会がどうだの、帝国座がどうだのと
云い募る時分になったら、余は是非この『土』読
ましたい」などと書いている。

農村出身の私も年頃になって、『土』を読もう
としたことがあるが、泥の中に引き摺られるよう
な気分には耐えられなくなり、途中で投げ出してし
まった。鬼怒川周辺の自然と人間を客観写生であ
りのままに描いた自然主義文学の名作とされてい
るが、小作人の勘次や卯平がこんな小説を読むは
ずがない。もし読めば、長塚節という地主は人を
馬鹿にしていると憤慨するのではなからうか。

私が今回なんとか読了できたのはその前に藤沢
周平の『白き瓶 小説長塚節』を読んだおかげで
ある。「白埴の瓶こそよけれ霧ながら朝はつめた
き水くみにけり」。

秋風の聞えぬ土に埋めてやりぬ 漱石